

---

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州に  
おける貝貨タブの補完貨幣化プロジェクトを  
めぐる現在の状況

---

一橋大学大学院 / 社会学研究科 / 博士課程

深田 淳太郎

---

富士ゼロックス株式会社 小林節太郎記念基金  
小林フェローシップ 2003 年度研究助成論文

---

---

## 謝 辞

本論文の執筆にあたっては指導教官の清水昭俊先生をはじめとする一橋大学大学院社会人類学共同研究室の諸先生に的確なアドバイスをいただき大変お世話になった。本論文で使用了資料の多くは現地での長期にわたるフィールドワーク（2002年10月－12月、2003年6月－2004年2月、2004年6月－2005年1月）で収集したものである。これらの調査は、2003年度の小林節太郎記念基金による研究助成、および平成14－16年度文科省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けることによって可能になった。またフィールドワークにおいては、筆者の的を射ない質問に辛抱強く付き合っているいろいろな話を聞かせてくれたトーライの人々をはじめ、多くの現地在住の方々にお世話になった。これらのすべての方々に深く感謝したい。

2005年12月

深田 淳太郎

深田 淳太郎

---

## 目次

	ページ
第1章：はじめに.....	1
第2章：トーライ社会におけるタブ使用の概観.....	2
第1節：トーライの人々.....	2
第2節：タブの物質的特性.....	3
第3節：トーライ社会におけるタブの循環.....	4
第3章：タブ補完貨幣化の経緯と行方.....	9
第1節：歴史的経緯.....	9
第2節：近年におけるタブとキナの互換的な使用の試み.....	10
第3節：批判的見解と今後の見通し.....	13
第4章：おわりに.....	17
註.....	18
参考文献.....	23
参考資料.....	25

---

## 第1章：はじめに

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州政府は現在、法定通貨キナ *kina*を補完する第二の通貨としてタブ *tabu*と呼ばれる貝殻の貨幣を使用するプロジェクトを推進している。すでに州内の多くの地域政府<sup>1)</sup>では人頭税や各種のライセンスの料金、裁判の際の罰金などを、またいくつかの公立学校では授業料を、タブで支払えるようになっている。

タブは、イーストニューブリテン州において人口のマジョリティを占めているトーライと呼ばれる人々が伝統的に使用してきた貝貨である。トーライはタブを婚資や賠償の支払いとして、葬式などの諸儀礼において展示、分配、交換する威信財として、また様々なモノの売買を媒介する交換媒体としてなど、広汎な用途に使用してきた。世界各地に見られるいわゆる「原始貨幣」の中で、タブは特にその交換媒体としての汎用性においてよく知られている [Douglas 1967, Einzig 1966]。西洋社会との接触以降、非西洋社会における「原始貨幣」の多くは、その交換媒体としての地位を国家の法定通貨に取って代わられてきたが、タブはトーライ社会において今日に至るまで交換媒体としての機能を保ちつつけてきている。

とはいえ、このことはパプアニューギニアの法定通貨であるキナがトーライ社会においては交換媒体として使用されていないということの意味するものではない。むしろトーライの人々の日常的な経済生活において中心的な交換媒体として使用されているのはキナである。今日、町の商店やマーケットにおいてタブが交換媒体として用いられることはほとんどない。しかしながらトーライの人々は、タブはあらゆるモノを購入することが可能であると主張する。そして実際に村の生活で、タブは様々な取引において交換媒体として使用されている。本稿はフィールドワークで得たデータおよびいくつかの文献資料をもとにして、この貝貨タブがトーライ社会においてどのように使用されており、また法定通貨キナとどのように相互に関係しているのか、その実態の粗描を試みるものである<sup>2)</sup>。

---

## 第2章：トーライ社会におけるタブ使用の概観

### 第1節：トーライの人々

トーライはパプアニューギニア、ニューブリテン島イーストニューブリテン州のガゼル半島北東部に居住しているオーストロネシア系のクアヌア語を話す人々である。人口は約14万人、同州の人口の60%強を占めるマジョリティである。また小規模な民族集団が大半を占めているパプアニューギニアでは、国全体で見てもトーライはかなり大規模な民族集団の一つである。

ガゼル半島の北端に位置するラバウルは、19世紀後半からのドイツによるビスマルク諸島一帯に対する植民地支配において、政治的・経済的な中心地として機能してきた。当時からラバウルの近郊ではココナツのプランテーションが盛んにおこなわれ、トーライはそれらのプランテーションで働き、また自らもココナツを栽培するなどして、パプアニューギニアの中ではもっとも早い時期から資本主義市場経済・貨幣経済に接触してきた。ココナツ、カカオなどの商品作物の栽培は今日に至るまでトーライの人々にとって中心的な貨幣獲得のための手段であり続けている。ヨーロッパ人との接触が比較的早かったことと、この豊かな収入源のために、トーライは現在に至るまで、パプアニューギニア国内だけではなく、メラネシア地域全体でも「もっとも豊かで、教育程度の高い」人々であるとみなされてきた[Errington and Gewerts 1995:56]。

また同時にトーライはパプアニューギニアの中でも、もっとも強く自らの伝統文化を保持している民族集団の一つであると言われる。トーライが自らの伝統文化を象徴する代表的な二つのものとして挙げるのが、トゥブアン *tubuan*と呼ばれる仮面と、本稿で取り上げる貝貨タブである。彼らは自らの伝統文化を特徴づけるこの貝貨を、葬式儀礼や婚資の支払いといったいわゆる伝統的な用途に用いるだけではなく、モノの売買の際の交換媒体として国家の法定通貨であるキナと並行して使用してきた。

図 1 葬式儀礼においてロロイを運ぶ老人とトゥブアン



著者撮影（2003年9月6日）

---

## 第2節：タブの物質的特性

### 第1項：タブの原材料

タブはムシロガイ<sup>3)</sup>という直径1センチ、高さ8ミリほどの小さな巻き貝を加工して作られる。この巻き貝の上部を切り落として中心に穴を開け、その穴に木の繊維で作った紐を通して数珠状につなぎあわせたものがタブである。原材料であるムシロガイは少なくとも19世紀末以降、トーライの居住地の近辺にはほとんど生息しておらず、基本的には外部で獲得されて持ち込まれるものだった。輸入元は時代によって異なるが<sup>4)</sup>、現在では主に隣国であるソロモン諸島から輸入されている。

交通機関が発達していなかった頃には、ムシロガイは、時間をかけ、危険を冒して遠方まで赴き、獲得してくる、まさに希少な財であった[Salisbury 1970: 282-3]。現在では交通機関も発達し、また他部族の支配する地域に行くことに伴う危険も大幅に減少している。しかし必要となる交通費や人件費、時間を考えると、現在もムシロガイを獲得するには大変なコストが伴う。実際、輸入されてくるムシロガイの価格は、それを原料として作られたタブが持つ価値（キナでの価格）と比べても決して安くない<sup>5)</sup>。ムシロガイを加工してタブを作成する作業は非常に根気を要するものの、基本的には特に困難な技術を必要とするわけではない。また特別な資格や権威がなければタブを作ってはならないという決まりもない。つまり原料のムシロガイさえ手に入れば、誰でもいくらでもタブを作ることができるのである。こういった状況下で、タブがインフレを起こさずに、その価値を保っているひとつの要因が、原料のムシロガイの希少性にあるということは今日においても言えそうである。

### 第2項：タブの計量単位

トーライがタブを使用、計量する際にもっとも頻繁に用いる単位はポコノ *pokono*である。この単位は別名でファゾム（英語のfathom、日本語で言えば「尋」）と呼ばれることからわかるように、大人が両手を広げたときの左右の手の間の幅で計量される。長さにするとおよそ180cmである<sup>6)</sup>。このポコノは、たとえば人头税は1ポコノ、イニシエーションで支払う額は2ポコノというように、タブの量に言及する際に基本的に用いる単位である。

長くつなぎ合わせたタブを短く分割して小さな単位で使用すること、短いタブをつなぎ合わせて大きい単位で使用することはいずれも可能である。1ポコノよりも小さい単位としては1/2ポコノにあたる1パパール *papar*、1/4ポコノにあたる1トゥラマリクン *turamalikun*などがある。これらの短い単位のタブは、指先から手首まで、あるいは指先から肘までといった身体の一部を使って計量する場合もあれば、単に目分量で計量する場合もある。逆にポコノよりも大きな単位としては10ポコノのことを1アリップ *arip*と呼ぶ。ある程度まとまった量のタブを運ぶときには、基本的にこの1アリップで束ねることが多い<sup>7)</sup>。

タブは長さだけでなく、貝殻の数でも計量される。その場合には貝殻1個分のタブは1パラタブ *palatabu*と呼ばれる。タブの量を貝殻の個数で言及するのは、主に商品を買収する際に小さな単位のタブを扱う場合においてである。例えば、商品Aは40パラタブだ、という形で価格が提示される。しかし通常、買い手は木の繊維から外してバラバラにした貝殻ではなく、短めの紐状のタブを用いて、この40パラタブ分の支払いをおこなう。また場合によってはタブはバラバラの貝殻の状態で扱われることもある。この場合は通常瓶に詰められて、交換や支払いに用いられ、330ml前後の容量の缶や瓶一本分の貝殻が5ポコノであるとされる。さらに別の形態としては、少なくとも100ポコノ、多いときに

---

は1000ポコノ以上のタブを車輪状に束ねて作るロロイ *loloi*と呼ばれる形態も存在する。

### 第3節：トーライ社会におけるタブの循環

さまざまな形態・単位のタブは、そのときどきの場面に応じて使い分けられる。本節ではタブがそれぞれの形態、単位において用いられる場面の記述を通して、トーライ社会においてタブが循環する様子を概観する。

人々の生活の中でタブの使用をもっとも日常的に見ることができるのは、村落での小さな取引においてである。前述したように、町の大規模なマーケットや商店においてタブで商品を売買することは現在ではほとんどないが、村落のレベルではさまざまな取引においてタブを使用する。たとえば道端の露天でビンロウや落花生、ココナツのジュースなどを売買する際には、しばしば支払いにタブを用いる。また村にある個人経営の商店では米やタバコ、缶詰などの町から買ってこられたさまざまな商品はキナだけではなく、タブで売られることがある。また商店ではなく、個人でタバコなどの商品を購入して日常的に携帯し、周囲の人々にタブで売っている姿もよく見られる。

図 2 スナック菓子とアイスを買っている女性



著者撮影（2003年11月19日）

こうした取引ではタブは主に短く切り離された形態で使用され、パパール（1/2ポコノ）やトゥラマリクン（1/4ポコノ）といった小さな単位、あるいは貝殻の数を表すパラタブといった単位で計量される。

また個人間のちょっとしたやりとりにタブが使用されることもある。たとえばしばらく雨が降らずに自分の家の水が無くなってしまい、やむなく近所の家タンクから水を汲ませてもらう場合などに、そのお礼として小さな単位のタブが渡すという場合である。こういった「ちょっとしたお礼」において、渡されたタブの長さについて言及されたり計量されたりということは通常はないが、やはりここで用いられるのも主には短い単位のタブである。

個人間の取引においてのみならず、既に触れたように、税金や各種のライセンス料、裁判の際の賠償金、罰金などの役所における諸々の支払いにもタブは用いられる。現在ではトーライの居住地域の大半では人頭税をタブで支払うことができる。また基本的に役所での決算はキナでおこなうため、タブで支払われた税金はキナに換えられなければならない。そのため役所ではタブが入ってくるとすぐにキナで売りに出すのだが、これは常にすぐに売りきれてしまうという。

以上のような村の中での小さな規模の取引や役所への税金などの支払いといった場面における使用が、タブの主要な循環ルートのひとつである。しかしタブは、こういった小さい単位でモノの売買などに使用されてトーライ社会を循環しているだけではない。トーライの人々は、ある程度の量のタブが集まると、それを長くつなぎ合わせて貯蔵し、もうひとつ別の循環ルートでの使用に備えるのである。

こうして貯蔵されたタブが使用される代表的な機会のひとつが婚資の支払いである。トーライでは、婚姻を成立させる手続きとして夫側の親族集団から嫁側の親族集団<sup>8)</sup>への婚資の支払いが必要とされている。この婚資の内容として期待されているのがタブである。婚資として支払われるタブの額は女性の教育程度や居住している地域<sup>9)</sup>など、それぞれのケースによって異なってくる。想定されている額は少ない場合でも100ポコノ、場合によっては800ポコノを超える場合もあり、概して非常に高額である。

一方でトーライの人々は、こういった直接的な対価の支払いにタブを用いるだけではない。それ以上に彼らが熱心に望んでいるのは、貯蔵した大量のタブでロロイを作ることである。トーライ社会においてはロロイを持つこと、それも大量のタブを束ねた大きなロロイを持つことは、即ち強い社会的

図 3 婚資の支払いをする男性



著者撮影（2003年11月19日）



な影響力を持つことを意味する。トーライ社会においてロロイが高い社会的価値を付与されている背後には、ロロイが帯びている強い神秘的な力があると考えられる。かつては、その力の強さのために女性はロロイを扱うことができず、またロロイが貯蔵されている小屋に立ち入ることも禁じられていたという [Salisbury 1970:278-9]。またロロイは、その神秘的な力の強さゆえに切ることが危険であると考えられているため、切る人は誰であれ強力な保護の呪術を身につけることが必要とされていた [Epstein, A. L. 1969:233]。

前述したようにロロイは大量のタブを車輪状に束ねて作られるものである。物理的にいえばロロイは単なる大量のタブに過ぎないが、実際にロロイに加工されるとタブはそれまでとはまったく異なった使用方法、用途、社会的意味を持つようになる<sup>10)</sup>。それまで日常的な取引における交換媒体として使用されてきたタブは、ロロイになると家の中や専用の貯蔵室に大切にしまいこまれるようになり、再び日常的な交換媒体として使用するために切り離され、外に出されるということは基本的になくなる<sup>11)</sup>。

ロロイが外に出され、使用されるのは限られた機会においてのみである。もっともよくロロイが使用されるのは、葬式関係の儀礼においてである。大きな葬式儀礼の際にはタブは、ミナマール *minamar* という竹で組まれた台に展示され、また死者のためにおこなわれるダンスの踊り手に対する謝礼として支払われ、あるいはバラバラに切り離されて儀礼の参加者に分配される<sup>12)</sup>。これらのタブの使用は死者の親族の義務であるとされており、人々に大きな出費を強いるものである<sup>13)</sup>。しかしその半面で、大きなロロイを飾り付けたミナマールを出したり、気前良く大量のタブを参加者に配ったりすることはその人物の社会的な権威を直接的に誇示し、また強化するものとなる。またこの葬式儀礼におけるもっとも重要なテーマは、死者が一生をかけて貯蔵してきたタブが切られ、参加者へ分配されることである。葬式で切り、分配するための十分なタブを残せずに死んだ人間は怠け者であったと評される、ということはしばしば言われることである。トーライの人々がタブを貯蔵しロロイを持ちたいと願う理由の中の大きなものとして、この自分の葬式でのタブの使用がある。

図 4 葬式儀礼の会場で展示されるロロイ



著者撮影 (2003年10月23日)

このように葬式儀礼は、タブを使用することで社会的権威を誇示するポトラッチ的な競争の場であり、また死者が一生をかけて貯めてきたタブを生者に受け渡すトーライの社会秩序の再生産において重要な意味を持つ場でもある。ここで主催者側から大量に分配されたタブを受け取った参加者は、このタブを家に持ち帰り、自らの、あるいは親族の婚資として、あるいは葬式において将来的に使用するために貯め込む。しかし中には、儀礼の会場でタブを受け取ると、すぐにその場の露天で売られているスナック菓子やアイスといった商品を購入するのに使用する人もいる。葬式儀礼はタブを持たない人にとってはタブを獲得するチャンスであり、同時に現金収入のない人にとっては分配されたタブでちょっとした娯楽商品を買うチャンスなのである。葬式などのタブが出回ることが予測される儀礼の会場では、たくさんの人が町でちょっとした商品を買ってきて、それをタブで売っている。近年に入り、日常的な交換の場でタブが使用されるケースが少なくなっている中で<sup>14)</sup>、大量のタブが確実に出回ることが分かっている葬式などの儀礼は、タブを獲得するための良い機会なのである。実際に、現在のトーライ社会でもっとも盛んにタブで商品が売り買いされているのを見ることができるのはこの儀礼の会場における小商業においてである。

図 5 葬式儀礼会場でロロイを切っている男性



著者撮影（2003年7月9日）

このようにロロイに加工されたり、あるいは貯蔵庫に貯め込まれたりしている大きな単位のタブと、日常的に交換媒体として使用されている小さい単位でのタブは、その形態、付与されている社会的な意味などが様々に異なっている。また使用される場面や、その方法、用途においても異なっているため、それぞれの循環のルートは切り離されて別々に存在しているように見えるが、実際には一つのものとして連結されている。トーライの人々は日常的な売買などを通して、社会を循環している小さい単位のタブを獲得し、それを大量に貯蔵してロロイに加工する。こうしてロロイに加工されたタブは、直接的にはモノの売買などの日常的な循環に戻っていくことはないが、しかし婚資の支払いや儀礼の際の分配などの限定された機会において再び切り離され、バラバラにされて様々な人々の手に渡る。

---

そして人々は、婚資や儀礼で受け取ったタブを再び日常生活における売買に使用する。ロロイに加工されることで、日常的な売買を通した社会における循環から切り離され、退蔵されたタブは、特別な機会に切り離され、バラバラにされることで、再び日常生活の売買に使用される交換媒体に戻るの  
ある<sup>15)</sup>。

---

### 第3章：タブ補完貨幣化の経緯と行方

#### 第1節：歴史的経緯

本節ではタブとキナの関係について、特にタブの交換媒体としての側面に注目して、19世紀末のヨーロッパ社会との接触以降、現在に至るまでの経時的変化を概観する。

かつてトーライ社会では市場などで売買されている全てのモノ、またトーライ人の提供する全てのサービスを、タブとの交換で手に入れることが可能であった。19世紀末の宣教師は「タブはこの地域の“national currency”である」[Danks 1888: 307]、「全ての商品のマーケットにおける価値はタブで表わされる」[Parkinson 1887: 121]という記述を残している。実際、接触の初期の段階では、両者の間の取引におけるタブの交換媒体としての力はドイツの法定通貨であるマルクと同等かそれ以上のものであったようである。19世紀末から20世紀の初期にかけて、トーライの人々はコブラに対する支払いとしてマルクやその他の交易品ではなくタブを要求したという記述もある[Kleintitshen 1906: 95]。また植民地統治政府は「19世紀の間は、種々の罰金をタブで支払わせており、1896年の歳入には923ポコノのタブも含まれていた」という[Einzig 1966:75]。

しかし同時にトーライの人々は、商品作物の生産などを通じて早い時期からグローバルな資本主義市場経済の影響を強く受けていた。特に20世紀に入り、トーライの人々の生活における法定通貨への依存の度合はだんだんと高くなってきたようである。1929年の世界恐慌によって主要な現金収入源であったコブラの価格が大暴落し、トーライの経済は大きな打撃を受けたという記述が、いくつかの文献で見られる[Epstein, A. L. 1969, Salisbury 1970]。これらの記述からは、この時代にすでにトーライの人々の生活には法定通貨が深く浸透しており、それゆえにグローバルな規模で展開する資本主義市場経済ともかなり密接に結びついていた、ということを読み取ることができる。

1950-70年代にかけて複数の人類学者がトーライ社会に調査に入ったが、彼等は「マーケットにおける全ての商品の価値はタブとドルの両方で提示されている」[Epstein, T. S. 1968: 23]、「旅行者がマーケットにおいてドルで買うのと同じ商品をトーライの人々はタブで購入する」[Epstein, A. L. 1979: 158]などと報告しており、当時タブはラバウルなどの大規模なマーケットにおいても交換媒体として使用されていた様子が見える<sup>16)</sup>。

1980年代に入ると、タブがラバウルなどの町の大きなマーケットで使用される機会はかなり減少してくる。そして現在、私が2002-2005年の間にイーストニューブリテン州に滞在し、観察した中では、町のマーケットや商店などの商品売買の場でタブが交換媒体として支払われているのを見たことはない。

このように19世紀後半のヨーロッパ人との接触以来、タブが日常的なモノの売買において交換媒体として使用される頻度はだんだんと下がってきているといえる。このことにはいくつかの要因が考えられる。もちろん複数の要因が組み合わさってこういった状況が生じたのだろうが、ここでは、ヒト、モノの地球規模での移動という字義どおりの意味でのグローバリゼーションという言葉がひとつの説明のキーワードになるだろう。

ラバウルなどの町では、商店の経営者の多くはオーストラリア系の華僑を中心とする外国人であり、またマーケットにもパプアニューギニア中から多くの非トーライ人が集まっている。彼らは基本的にはタブを受け取っても使い途がなく、したがって商品に対するタブでの支払いを受け付けない。また

---

特に外国人の経営する商店には、キナでのみ購入可能な多種多様な魅力的な商品——米やコーヒー、コーラなどの食料品から、シャツなどの衣料品、音楽テープやラジカセなどの娯楽用品、嗜好品など——が並んでおり、これらの商品は現在トーライの人々の生活に深く浸透している<sup>17)</sup>。このような外部社会からのヒト、モノの流入は、トーライの人々の生活のあり方を大きく変え、日常生活におけるキナへの依存度を上げている。その結果、キナを手に入れるためにトーライ人同士の間での取引においてもキナが用いられるようになってきている。

しかし、このように事実としてタブの交換媒体としての使用機会が減ってきている一方で、多くのトーライの人々は「タブこそがわれわれの真の貨幣であり、現在でも強い力を持っている」と言う。これはタブが葬式などの儀礼で欠くべからざるものとして使用され、特別な力を持つということを中心として主張しているという側面ももちろんあるだろうが、決してそれだけのものではない。トーライの人々にとってタブは交換媒体としても依然「強い」力を持ち続けているのである。その「強さ」としては以下のようなことが挙げられる。

ひとつには近年の政府主導のタブの補完貨幣化の動きがある。多くの地域政府では税金や各種ライセンスの料金をタブで支払えるようになり、またいくつかの学校では授業料をタブで支払えるようになってきている。かつてキナでしか支払えなかったモノをタブでも支払えるようになったことは、タブが「強く」なったことに他ならない。またタブはキナとの関係においても「強さ」を増している。1994年の変動為替制への切り替え以降、キナの価値は下落を続けており、パプアニューギニアは常時インフレ状態にある<sup>18)</sup>。つまりキナの購買力が落ちているわけだが、これに対して村におけるタブの購買力は基本的には下がっておらず安定した力を持ちつづけていると人々は言う。タブがキナに比して「強い」力を保っているということは、タブとキナの交換レートを見ても明らかである。1988年には1ポコノ=2キナだったのが、1998年には1ポコノ=3.5キナ、2002年には1ポコノ=4-5キナにまで上がっている<sup>19)</sup>。

また、このようにタブの価値はキナとの比較において上がっているだけでなく、近年ではタブそれ自体の希少性が高まったために上がったとも言われる。このことは、モノの売買における主要な交換媒体がキナになったことでタブが日常的な交換の場に出てくる機会が減ってきているために、タブを獲得するチャンス自体が希少になっていることから説明されることが多い。

## 第2節：近年におけるタブとキナの互換的な使用の試み

前述したように、現在イーストニューブリテン州政府はキナを補完する第二の通貨としてタブを活用するプロジェクトを推進している。本節ではこの政府によるプロジェクトを中心に、タブとキナの互換的な使用をめぐる近年の状況について概観する。

1990年代に入り、それまではキナでのみ支払いが可能になっていた人頭税を、いくつかの地域政府ではタブで支払えるようになった<sup>20)</sup>。このことについては、いつからはじまったかなどを記録した政府の資料を見つけることはできなかったが、フィールドワーク中に地域政府関係者を含む多くの人々がそう話しているのを聞き、またいくつかの文献にも同様の記述を見ることができる [Errington and Gewertz 1995: 60, 小坂 2002: 32]。

2005年1月に、イーストニューブリテン州の9つの地域政府<sup>21)</sup>においてインタビューを実施したが、

そのうちの8つの地域政府では人頭税をタブで支払うことを公に認可していた<sup>22)</sup>。また、ラバウルディストリクト管内のバラナタマン地域政府の2001年の納税記録<sup>23)</sup>を調べたところ、その年に人頭税を納めた1,205名のうちの523名（全体の43%）がタブを用いて支払いをおこなっていた。これらのことから、現在トーライが居住している地域の大半では人頭税をタブで支払うことが可能になっており、実際にその制度はよく利用されていることがわかる。タブとキナの互換的な使用の促進は政府側からの一方的な押しつけには終わっておらず、人々もそれを受け容れていると言える。

表 1：バラナタマン地域政府における人頭税の二つの支払い手段の件数

	キナのみでの支払い	タブを用いた支払い <sup>24)</sup>	全支払い件数
男性納税者	322	220	542
女性納税者	360	303	663
全納税者数	682	523	1205

(2001年バラナタマン地域政府の納税記録をもとに著者が作成)

また現在の州政府によるタブの補完貨幣化プロジェクトに大きな影響を与えているのが、1992-94年にラバウルの町で業務を展開した貝貨銀行である。これは元州議会議員のヘンリ・トクバク Henry ToKubak氏が運営していたもので、その事業内容は「伝統的貨幣（タブ）を対象に銀行業務を行う事業」と登録されていた。この貝貨銀行は政府から銀行としての認可を受けていたわけではないが、実際に「貝貨預金」、「貝貨を担保としたキナの貸付」、「キナと貝貨の交換」、「貝貨の材料販売」、「貝貨の制作代行」の五つの業務をおこなっていた[小坂2002, 2003]。しかしこの貝貨銀行は1994年のタブルブル山の噴火<sup>25)</sup>の影響で資産の大半を失い、業務を停止せざるをえなくなった。その後は現在まで元の形態での業務は再開されていない。

こういった状況の中で、イーストニューブリテン州では1999年に「伝統的財の振興と流動化 Promotion and Mobilization of Customs Wealth<sup>26)</sup>」と題した計画が提出された。州議会はこれを承認し、州内においてタブをキナと並行して第二の法定通貨として使用していく方針を決定した[Post Courier 1999a, 1999b]。当時の州副知事レオ・ディオン Leo Dion氏<sup>27)</sup>は、この計画書を提出した背景のひとつとして、近年のキナの価値下落とそれに伴うインフレーションを挙げ、「物価の上昇によりモノを購入するための十分な金を稼ぐことが難しくなっており、そのため州内では人々が伝統的通貨をモノの購入に使用できるように許可するべきである」[The Independent 2000]と言っている。この段階ではタブを流通させる具体的な政策は決定されていないが、ひとつの留意点として、タブを流通させるためには厳密に規格化する必要があるとしている。前述したとおり、タブは一単位に含まれている貝殻の数や長さが非常に曖昧である。こういったばらつきを是正し、また具体的な流通の方策を検討するための調査が計画された。

この調査が実行されたのが2001年である。調査は入札にかけられ、オーストラリアのコンサルティング会社が落札した<sup>28)</sup>。この調査では、タブを「地域通貨<sup>29)</sup>」の一種として捉えるアプローチがとられている。2002年にはこの調査の報告書が州政府に提出されているのだが、この報告書は部外秘になっているので、残念ながらここで資料として用いることはできない。その代わりに、この2001年の調査を受けて2003年に計画された第二段階の調査の入札の際に提示された調査事項書[East New Britain

---

Provincial Administration 2003]に書かれている内容から、2001年の第一段階の調査の結果、そして第二段階の調査の見通しを簡単に紹介する。

州政府は第一段階の調査を「タブの流動化によってもたらされる文化的経済的な利益とリスク、さらにはタブの所有者によるタブの経済的、伝統的、文化的価値についての認識を提示した」ものであると評価し、この報告を受け、「タブは補完貨幣として効果的に機能しうる」という基本的な見解を提示している。そして、この補完貨幣化によって「タブは伝統的な生活の方法で生きていきたいと願っている人々、そして貨幣経済により深く関わっていききたいという人の双方に実現可能な代替手段を提供」し、政府は「十分な追加的な歳入を得ることができ」、また「タブは若い世代をトーライの文化へと編入していくことへの動機付けとして機能しうる」としている。このように第一段階の調査の結果を受けて、州政府は、タブの補完貨幣化をおこなうことには、社会的、経済的、文化的な面において明らかなメリットがあるとしている。そして、つづく第二段階の調査においては、さらに具体的な「タブの規格策定と流通促進の方策」を決定することを目指している。この第二段階の調査は前述したように2003年に入札にかけられたが、入札してきた業者の質や州政府の予算難などの問題のため2005年1月の時点ではまだ実施に移されていない。

このプロジェクト以外にも、タブとキナの互換的な使用は様々な形で推進されている。2002年には州政府は学校の授業料をタブで支払えるようにする方針を発表し[Post Courier 2002]、また同年タブとキナの交換業務をおこなう民間の交換所「バラナタマン・タブ交換所 Balanatanaman Tabu Exchange」が、ラバウルディストリクト管内のバラナタマン地域政府のバックアップを受けて立ち上げられている<sup>30</sup>[Post Courier 2002b]。

現在では、前述のもの以外にも民間のタブとキナの交換サービスが運営されている。葬式儀礼や婚資の支払いに際して、手持ちのタブが不足している人のために、知り合いがタブを融通しその対価をキナで受け取るということは昔からおこなわれていたが、タブをキナに替えるサービスが提供されるようになったのはごく近年のことである。例えば元国会議員のナキクス・コウガ Nakikus Konga氏は、顧客が持ち込んだタブを10ポコノ=40キナで買い上げ、タブを必要としている顧客には10ポコノ=50キナで売っている。彼の交換サービスの知名度はまだ高いものではないが、人々は儀礼の際に必要なタブを手に入れるために、あるいは逆に学校の授業料を支払うためのキナを工面するために彼のサービスを利用している。彼の交換所の出納帳によれば、2003年10月から2004年11月の約一年間で、のべ257人がこの交換サービスを利用している。合計すると3570ポコノ分のタブを13,920キナで買い取り、2,400ポコノ分のタブを12,000キナで売っている。この一年間の利用の数字だけから、このサービスが人々の生活に浸透している度合や今後の見通しを判断してしまうのは早計であろう。しかしながら、この交換サービスを利用している人が一定数存在しており、少なくともその利用者にとってはこのサービスが有益であり、利用価値があるものであると認識されていると言える。

以上見てきたようにタブとキナの互換的な使用は、1990年代以降、州政府などの政府機関を中心に、さまざまなレベルにおいて推進されてきている。またこの動向に対する人々の反応も、私がフィールドワーク中に見聞した情報を総合すると、概ね好感的である。

だが今のところ、まだいくつかの問題点——例えばタブの長さや貝殻の数などにおける規制の欠如など——が解決されてはならず、また使用できる範囲も政府に対する支払いが中心で、包括的なもの

---

であるとは言い難い。州政府は、タブとキナの互換的使用およびタブの補完貨幣化は様々な面において効果的に機能するという見解を示しているが、今後この動向が人々の生活にどのような影響を与えるのか（あるいは与えないのか）はまだまだ予断を許さない段階である。また必ずしもすべてのトーライが諸手をあげてこの政策に賛成しているというわけではない。

次節では、州政府がタブの補完貨幣化によってもたらされるだろうと見ている文化的、社会的、経済的な諸側面における影響について、トーライの人々自身による代表的な批判的見解を紹介し、最後に私自身が感じる問題点、および今後の見通しを提示したい。

### 第3節：批判的見解と今後の見通し

2002年のRadio Australiaの記事によると、パプアニューギニアのNational Cultural CommissionのExecutive Directorであるジェイコブ・シメット Jacob Simet氏はタブの補完貨幣化に慎重な姿勢を示している。彼は「(イーストニューブリテン州のおこなう) 調査は何世紀も昔から持続的におこなわれている慣習の文化的な価値が、今後もずっと衰退しないでいけるのかどうかについても考慮すべき」であるとし、またタブは「強い儀礼的、宗教的な価値を持ち、そしてキナに対するオルタナティブとしては機能しえない」と結論づけている[Radio Australia 2002. ただし ( ) 内は著者による補足]。

また2002年に実施したインタビューにおいて、ある人物<sup>31)</sup>は、私とその年に開設された前述のバラナタマン・タブ交換所について質問すると、それは良くないことであると明確に否定し、また州政府によるタブの補完貨幣化についても反対の意を表明した。彼はトーライの伝統文化であるタブと法定通貨であるキナは明確に区別するべきであり、この両者を混同することは誤ったことであるという意見を持っていた。

ここで挙げた二人の人物の主張において共通していることは、タブのキナとの互換的な使用がトーライの伝統文化とは相容れないという点である。この見解は、州政府による見解——タブを補完貨幣化し、より広い範囲での流通を促進することはトーライの伝統文化の強化につながる——とは明確な対象をなす。伝統的に使用してきた貝貨を、昔からの適切なやり方を守って使用することが伝統文化を守ることになるのか、それともより活発に流通させることが伝統文化を強化していくことにつながるのか。そもそも、どのようなやり方がタブの正しい使用方法であるかを確定しえない以上、このどちらの立場が正しいということは容易には言えない。

次に、州政府の政策においてもっとも重要であると思われる点、つまり補完貨幣化することによってタブは現在よりも流動化するかどうかについて検討してみたい。州政府はタブを補完貨幣化することは、文化的な側面のみならず、社会的、経済的な側面においても意義深い成果をもたらすとしている。前述したように州政府の推計によれば、現在タブはその全体量の3/4が長くつながれた形、あるいはロロイに加工された形で退蔵されており、残りの1/4しか流通していないとされている。この退蔵されているタブを流通の場面に引っ張り出し、その流動性を高めることは、経済的な側面での狙い——第二の通貨としてタブを活発に流通させることでキャッシュフローの総量を増やし、経済活動を刺激する——においても、社会的な側面における狙い——タブとキナの互換的な使用を推進することで、タブ保持者とキナ保持者の両者に様々な社会的な状況に対応するオルタナティブを与える——におい



---

ても不可欠の条件となる。果たして、補完貨幣化することによってタブの流動性は本当に高まるのだろうか。

結論から先に言ってしまうと、具体的な補完貨幣化の方策が定まっていない現在の状況ではこの問題に対してははっきりとした見通しを立てることは不可能である。流動化する可能性もあれば、しない可能性もある。私自身はこの政策に対して賛成・反対いずれの立場に立つつもりもないので、ここでは両方の考えられる可能性を検討してみたい。

最初に流動化しない可能性から見ていこう。まず確認すべきは、多くのトーライが言うように、州政府がこの政策を打ち出す以前から、タブはあらゆるモノを買うことができる交換媒体であったということである。つまり、政府がそれを公認するかどうかによらず、タブは潜在的にキナと同様の力を持っていた／いるということである。ただし、このタブが潜在的に持つキナと同様の交換媒体としての力は、これまで必ずしも全面的には顕在化されてこなかった。短い単位のタブは様々なモノの売買に使用されていたが、貯蔵されている長い単位のタブやロロイが日常的なモノの売買に使用されることはなかったのである。その結果として、タブ全体の3/4は日常的な流通の場面には出てずに退蔵されていた。今回の政策は、このタブが潜在的に持っていたキナと同様の交換媒体としての力を州政府が公に認めること顕在化し、退蔵されているタブを流通の場に引っ張り出してくることを狙ったものである。

一見すると理にかなっているようにも思えるが、しかしこの政策は重要な点を見落としている。問題はタブが退蔵されている、その理由にある。なぜトーライの人々はタブを直接的な交換に使用せずに、退蔵しロロイに加工するのか。それは、タブが十分な交換媒体としての能力を欠いているからだろうか。もしこの理由が正しいならば、交換媒体としての価値を公認することによって、退蔵されていたタブは交換媒体として流通の場にてでくだろう。しかし、おそらくはタブが退蔵されている最大の理由はそこにはない。最初に確認したように、タブは公認されようとされまいと、あらゆるものを購入する能力を持つ交換媒体なのである。トーライの人々が大量のタブを貯め込み、それを束ねたロロイを使わずに大切に退蔵しているのは、Ⅱ章の3節で述べたように、それがキナを保持し、使用することとは明らかに異なった社会的な意味を持っているからである。だとするならば、補完貨幣化することでタブの潜在的な力を顕在化することによって、タブを貯蔵庫の中から流通の場に引っ張り出すという州政府の狙いは必ずしも思い通りにはいかないだろう。

次に、補完貨幣化によってタブが流動化する可能性を検討しよう。上ではトーライ社会においてタブを所有することの意味から考えたが、この問題はトーライの人々のキナに対する需要という面からも見ていく必要がある。前節で見たように、人頭税のタブでの支払いは広く受け入れられており、実際に半分近くの人がこの制度を利用している。このことが意味していることは、キナよりもタブでの支払いの方が都合がよい、あるいはキナは持っていないがタブなら持っているという人が少なからずいるということである。

2000年のセンサス[Papua New Guinea National Statistical Office 2002]によると、イーストニューブリテン州に居住する15歳以上の男女124,269人のうち、何らかの形でキナでの収入を得ることができるのは42,537人と、およそ全体の1/3である。このうちで賃金労働者は17,906人、残りは商品作物の栽培や漁業などから収入を得る自営業者である。安定してキナの収入を得ている賃金労働者は全体の15%にすぎない。商品作物の栽培は、中には大規模な投資をおこなって大きな利益を得ている人々も

いるが、こういった大規模な投資が可能な人はほんの一部であるということ、そして季節毎の買い取りの価格が大きく変動することから、やはりキナでの収入は安定しているとは言い難い。そして残りの2/3の人々、つまり大半のトーライの人々は基本的にはキナでの収入を持たないということになる。

一般的に言って、州都のココボやラバウルなどの一部の町をのぞいた村落部に住む人々は、日々の食料の多くを家族や親族の中で自給することが可能なため、彼らにとって村の生活においてキナは絶対に必要なものではない。しかしながら、税金や授業料の支払い、あるいは缶詰や米、服などを買うためには、やはりキナは生活上必要となってくる。こういうことを考えると、安定したキナでの収入を持たない人々の生活にとっては、これまでキナしか使えなかった局面においてタブを使えるようにするという州政府の政策は非常に有益なものであると言える。

前述したコウガ氏の交換所の記録を見ると、おそらくはこうした生活上の必要からなされたと思われる少額のタブからキナへの交換が取引の多くを占めているということが分かる。全取引257件のうち、タブをキナに交換した件数が219件と全体の85%である。さらにこのうち交換の最小単位である10ポコノのタブを40キナの現金に交換する取引が138件と、実に取引全体の54%を占めているのである。これらの件数の絶対数の多寡は判断しかねるが、しかしながらタブとキナの交換サービスに対する需要の中において、こうしたタブからキナへの少額の交換が大きな部分を占めているということは、ひとつ今後のタブとキナの互換的な使用の展開を見ていく上で興味深い事実であると言える。タブとキナの互換的な使用の促進、そしてタブの補完貨幣化は州政府の言うとおりの人々の生活を助けうるのである。

表 2：コウガ氏の交換所におけるタブ取引額毎の取引件数

取扱量 (ポコノ)	10	20	30	40	50~99	100~	
タブからキナへ (件数)	138	45	22	11	3	0	219
キナからタブへ (件数)	10	7	3	1	6	11	38
計 (件数)							257

(コウガ氏の運営する交換所の交換記録をもとに著者が作成)

一方でこの数字はもうひとつ興味深いことを示唆している。全体の取引の85%がタブからキナへの交換であるということは、逆に言えば、このタブをキナに替えた人々のうちの多くは、この交換所において再びタブを取り戻すことができていないということである。キナは持っていないがタブなら持っている人という形でこの少額のタブをキナに交換する人々を想定したが、彼らにしても無尽蔵にタブを持っているわけではない。彼らはこの交換によってタブを失うのである。では彼らが交換所に持ち込んだタブは、誰が買うのか。コウガ氏の交換所でのキナからタブへの交換の件数は38件あるが、このうちの21件が150キナ(30ポコノ)を超える大きな額の取引である。中には1,000キナ(200ポコノ)、あるいは2,500キナ(500ポコノ)という大口の取引も含まれている。これらの多額のキナを必要とする取引を、キナでの安定した収入を持たない人がおこなったとは考えにくい。おそらくは政府の要職にあたり、大きなビジネスを展開していたり、あるいは大規模なプランテーションを営んでいるような、キナを大量に持つ人物が、葬式儀礼で使用するために購入したのだろう。ここからはタブとキナの交換サービス、ひいてはタブとキナの互換的な使用の推進に対するもうひとつ需要が見えて

---

くる。キナ経済において豊かな人々が、葬式などの伝統的な儀礼において使用する大量のタブを入手するためにこのサービスを利用するのである。

このようにタブとキナの互換的な使用の推進に対する二つの需要——キナを持たない人々が、生活の必要上からタブをキナに替えるということと、キナを持つ人が社会的な権力を強めるためにキナでタブを購入すること——を見ると、州政府が言うように、タブの補完貨幣化はタブの流動性を高め、そして「伝統的な生活の方法で生きていきたいと願っている人々、そして貨幣経済により深く関わってきたいという人の双方に実現可能な代替手段を提供」するのかもしれない。しかしその一方で見逃してはならないのが、キナ経済において豊かな者がさらにタブにおいても富み、キナを持たない者がさらにタブも失っていくという、極端な社会の二極化につながっていく可能性である。

以上、ここまで見てきたように、補完貨幣化することによってタブは流動化する可能性もあるし、流動化しない可能性もある。州政府の見通しにおいては、タブの補完貨幣化は文化的、経済的、社会的なそれぞれの側面において非常に有意義であるとされているが、それらはいずれも補完貨幣化することによってタブの流動性がより高まるということを前提としている。それゆえ、この流動性が高まるのかどうかという問題は、今後のタブをめぐる状況を見ていく上でひとつの大きなポイントとなってくるだろう。さらに、文化的な側面からの批判的な見解、および社会の二極化の可能性の指摘において見たように、仮に州政府が意図するとおりにタブの流動性が高まったとしても、そのことがもたらす影響が必ずしもトーライの人々にとって好ましいものであるとは限らないということも忘れてはならない。

---

## 第4章：おわりに

本稿では、現在のトーライ社会における貝貨タブの使用の具体的な状況、さらに法定通貨であるキナとの関係について概観してきた。タブはトーライの人々の生活において、婚資の支払いや、儀礼において展示、分配、交換されるなど、いわゆる伝統的な目的で使用されるのと同時に、日常的なちょっとしたモノの売買などにおける交換媒体としても用いられている。またタブはロロイに加工されると神聖な価値を帯び、トーライ社会の秩序において特別な意味を持つようになる。そして今日、特に注目されるのがタブの交換媒体としての側面である。法定通貨キナとタブの互換的な使用がさまざまな形で推進されており、その中には州政府によるタブの補完貨幣化のプロジェクトもある。これらの動向は現在では、概ねトーライの人々には好意的に受け容れられている。しかし具体的な規制をどうするのか、あるいは本当にタブの流動性が高まるのかなど、いくつかの問題も残されており、どういった方向へ進んでいくかは未だ予断を許さない状況にあると言える。

最後に今後の研究における問題意識と方向性を確認して本稿を閉じたい。トーライ社会におけるタブのような非西洋社会の「原始貨幣」が、西洋社会と接触し、資本主義市場経済の浸透が進んだ後にも国家の法定通貨と並行して使用され、さらには法律で規定された通貨としての地位を得ようとしているケースはあまり他に例を見ないものである<sup>32)</sup>。またこの動向は、現在世界中で見られる地域通貨（補完通貨）プロジェクトの文脈から見ても珍しい例である。多くの地域通貨が、その理念には多くの賛同を得ながらも、実際にはあまり活発に使用されているとは言い難い[湖中 2005] のに対して、トーライ社会におけるタブの使用頻度は非常に高いものである。タブは法定通貨と並行して現在も交換媒体として使用され続けている数少ない「原始貨幣」であり、かつ世界中でもっともよく使用されている地域通貨のひとつなのである<sup>33)</sup>。

このようなタブの貨幣としての、ある意味で特殊なあり方を見ると、不可避免的にひとつの問いが浮かんでくるだろう。なぜ、いかにして、この一周辺社会における貝殻の貨幣が、交換媒体として法定通貨と共存することが可能になっているのか。この問いは、トーライ社会という極めて特殊な一社会において発せられるものであるが、しかし同時にグローバルな規模で拡大する資本主義市場経済の影響下に否応なく置かれる現在の各ローカル社会について研究する人類学にとって、そしてそのうちのローカル社会に生きるわれわれにとって非常に興味深い問いであると言える。この後の研究ではこの問いに答えていくことがひとつの大きな課題になってくるだろう。

---

## 註

- 1) 行政単位 “Local Level Government” を指す。イーストニューブリテン州における州政府以下の行政単位は、州政府 Provincial Government – 地方政府 District Government – 地域政府 Local Level Government – 村 Wardである。
- 2) 本報告書は『くにたち人類学研究』（第一巻 2006年）に掲載された論文『パプアニューギニア、トーライ社会における貝貨タブをめぐる現在の状況』をもとに多少の資料の追加と改稿をおこなったものである。
- 3) 本稿で「ムシロガイ」と表記する貝は、ムシロガイ科nassariidaeに属する巻き貝の一種を指すものとする。この貝の名称はEpstein. A. L. [1963]では “nassa immersa”、またDeMeulenaere [2002]では “nassa callosa”、あるいは “nassa camelus” と表記されており、その学名は明確に同定されていない。インターネット上の貝を専門に扱ったサイト (URL: <http://www.bigai.ne.jp/> や URL: <http://www.gastropods.com/index.html> など) で情報を収集した結果、ムシロガイ科の貝について書かれた文献[Cernohorsky: 1984]に、この貝が学名 “Nassarius (Plicarcularia) camelus” として掲載されているとの情報を得た。しかし本稿執筆の段階ではこの情報の真否の確認はとれていない。今後、専門家に助言を求めるなどして学名を同定するつもりである。
- 4) ムシロガイは19世紀以前はトーライが住んでいるガゼル半島のブランチ湾の海岸でも採取することが出来たが、その採取には潜水の技術が必要であったという [Einzig 1966: 73]。そして、少なくとも1880年代以降 (おそらくはそれよりもだいぶ前から) その主な供給地はニューブリテン島の北海岸のナカナイ地方になった。その後1950年代以降はニューブリテン島の南海岸から、現在ではニューギニア本島やブーゲンビル島、さらには遠いところではソロモン諸島からも供給されるようになっている [Salisbury 1970: 285, Errington and Gewerts 1995: 54]。このようにムシロガイの供給地が時代とともに変わっていくことに関しては、一定期間以上たつとその土地のムシロガイを取り尽くしてしまい、そのたびに新しい供給地にかわっていくのだ、という説明がなされることが多い。
- 5) ムシロガイは空き缶で計量されて売られる場合が多いが、330mlの缶一杯の価格がだいたい20キナ程度である。この缶一杯のムシロガイから作られるタブはだいたい5ポコノ分であるという。つまり20キナ分のムシロガイが、5ポコノ分のタブになるということである。1ポコノ=4-5キナという現在の標準的な交換レートからすると、5ポコノのタブは20-25キナ分の価値をもつと考えられる。木の繊維のコストや作成にかかる時間、人件費を考えれば、原料のムシロガイを買って、それをタブに加工して売っても、その差額から得られる利益はさして大きなものにはならない。
- 6) ただし、1ポコノ=180cmのタブをメジャーなどを使って計量することはほとんど無い。税金の支払いや交換所での交換などの比較的厳密な計量が求められるような場においても、基本的にタブの計量は腕を用いておこなう。
- 7) これらの様々な単位の呼称は、トーライ社会の内部でも地域によって様々に異なる。さらにそれぞれの単位で表されるタブは、その長さや含まれる貝殻の数に関する厳密な決まりやチェックがあるわけではなく、したがって同じ単位とされるタブでも質や量においてかなりのばらつきがある。例

- 
- えば1980年代にガゼル半島に調査に入ったNeumann[1992: 184]によると、1ポコノに含まれる貝殻の数は、同じ村の中でも320-350個程度でばらつきがあったという。
- 8) トーライの社会構成原理において基本となる単位は、ヴナタライ *vunatarai* と呼ばれる母系親族集団である。土地などの財産は基本的にこのヴナタライの内部において相続される。
  - 9) 婚資の額に関してはしばしば揉め事が起こり、裁判に持ち込まれることもまれではない。そのため、多くの地域政府はその場合の判決の基準となる婚資の最高額を定めている。その額が各地域政府によって150ポコノから300ポコノまでと倍近くの開きがあることから、婚資の額が地域ごとに異なっていることは推測できる。
  - 10) 交換媒体として使用されるタブがロロイになることによって使用方法や意味を変えるということについては別稿[深田 2002]で詳しく論じた。
  - 11) Salisburyの民族誌には、いったん束ねて作り上げた「ロロイをバラバラにするのは究極の恥である」という記述がある[1970: 297]。
  - 12) これらの儀礼におけるタブの使い方はトーライの中でも地域によって大きく異なってくる。例えば私が調査の基盤をおいた村の周辺では、ミナマイ *minamai* と呼ばれる葬式儀礼において、会場にロロイを飾りつけ、あらかじめ家でロロイを1アリップ単位のタブに切り、それを会場に持ってきて分配する。しかし他の地域では会場にロロイを飾りつけない場合もあり、また会場にロロイを丸ごと持ってきて、その場で切り離して分配するところもある。ただいずれのケースでもロロイが何らかの形で参加者に見せられているという点は共通している。
  - 13) タブだけでなくキナでも相当の出費が必要となる。例えば、2003年に私が居住する村で開催された葬式儀礼において、死者の近い親族でありその儀礼を主催した人物は、その一日の儀礼のために現金を1200キナ、タブを150ポコノ使ったという。
  - 14) イーストニューブリテン州の推計によると、トーライ社会に存在しているすべてのタブの3/4がロロイの形態で貯蔵されており、残りの1/4が表に出て流通しているのだという。[Post Courier 1999a]。また1960年代に調査を行なったSalisburyの推計においても全てのタブのうちの3/4はロロイの形で貯蔵されており、残りが流通しているとされている [Salisbury 1966:116]。ただしSalisbury自身はこの数字には±25%程度の誤差があると言っている。私見では、このような莫大な数字の推計は極めて困難であり、州政府にその推計を可能にするデータがあるとは考えがたい。従って、この数字を根拠として何かを主張するのは非常に危険なものであり、あくまでも参考程度に留めたい。
  - 15) ブロックとパリーの分析枠組み[Block and Parry 1986]を用いれば、日常的なモノの売買における小さな単位のタブの循環を短期的なサイクルshort-term cycle、ロロイに加工されてからの婚資や葬式での使用を長期的なサイクル long-term cycleと整理できるかもしれない。この分析枠組みではこの二つの秩序は互いに相反するものではなく、相互補完的に関係しあって取引秩序全体を構成するものであるとされている。タブの循環においても小さい単位のタブの循環と大きな単位のタブの循環は決して対立しておらず、互いに関係しあうものである。したがって彼らの分析枠組みは、このタブの循環をかなりの程度的確に説明することを可能にする。しかしこの分析枠組みを採用することは、本稿では見送りたい。理由は二点ある。一点は、彼らの分析枠組みが当該社会における

---

取引秩序全体を対象にしたものであるのに対して、ここで私はトーライ社会における取引秩序全体ではなく、タブの循環だけを便宜的に抜き出して説明しているということである。もう一点は、トーライの人々自身は、小さな単位のタブの使用と大きな単位でのタブの使用を、短期的な秩序と長期的な秩序というように分けては説明しないということである。ブロックとパリーの分析枠組みの有効性と問題点についてはまた別稿で詳しく論じたい。

- 16) このような調査者の記述の一方で1960年代の早い時期からすでにラバウル等の大規模なマーケットでの主要な交換媒体は法定通貨であった、と話す人も少なくない。過去に「実際に何があったのか」を突き止める、あるいは決定することはきわめて困難である。
- 17) たとえば米はパプアニューギニアではほとんど生産されておらず、その大半はオーストラリアからの輸入品である。しかしトーライの人々は非常に米食を好み、現在では日常的な食生活の一部となっている。またある種の儀礼においては米の食事を参加者にふるまうことや生の米を祝福として振りかけることが慣例になっているということからも、この輸入食品がトーライ社会に深く浸透していることが分かる。
- 18) パプアニューギニアの統計局が発行している資料によればラバウルの物価指数（1977年を100とする）は1994年9月255.9だったが、2003年9月には737.8にまで上がっている [Papua New Guinea National Statistical Office 1997, 2003]。
- 19) タブの価格上昇は、原料であるムシロガイを獲得し、運搬するための費用がインフレに伴い上昇したためということからも説明される。
- 20) 人頭税は地域政府の収入であり、その額や徴収の方法を決定するのは各地域政府である。従ってタブでの支払いを認めるのは地域政府の決定による。しかし実際に税金の徴収を行うのは村レベルにおいてであり、地域政府レベルでタブでの支払いが認められる以前から、人頭税はタブで支払うことが可能であったという話も多く聞いた。この場合は村レベルの徴収時にタブでの支払いを受け付け、その場ですぐにそのタブがキナで売られ、結果としてすべての税金はキナの形で地域政府へ集められる。
- 21) イーストニューブリテン州は4つのディストリクトからなっており、トーライはこのうちの3つにおいて人口のマジョリティを占めている。私がインタビューを実施したのは、この3つのディストリクトの管内に全部で12ある地域政府の中の9つにおいてである。残りの3つの地域政府でのインタビューを実施していないことには特別な意図があったわけではなく、地理的・時間的な制約からである。
- 22) 私がインタビューで訪問した中で、唯一、人頭税をタブで支払うことを認めていなかったのはラバウル都市地域政府であった。この地域政府はその名のとおりに、ラバウルの町を中心とした地域を治めている。インタビューに応じてくれた市長代行は、タブでの支払いを認めていない理由として、ラバウルの町にはトーライ人以外の外国人やパプアニューギニアの他の州からの出身者が多数居住しており、タブでの支払いを認めることは彼らの利便をはかることにはつながらないから、と説明してくれた。ちなみにこの説明をしてくれた市長代行自身がパプアニューギニア本島のマダン州の出身者である。

- 
- 23) 多くの場合、役所の納税記録にはキナでの金額が書かれているだけで、その税金がタブで支払われたのかキナで支払われたのかを判別することはできない。しかしバラナタマン地域政府の役所では、キナとタブのどちらかで支払いがなされたのかが書き込んである資料を、2001年納税分に限り、見つけることができた。
- 24) この項目「タブを用いた支払い」には、人頭税の全額をタブのみで支払っている場合と、タブとキナの両方を用いて支払っている場合の二つの支払い方法が分類されている。ここで問題としているのは、これまでキナでしか支払えなかった人頭税がタブでも支払えるようになったということである。タブを用いて支払っているという点においてこの二つの支払い方法は同じ意味を持つものであると考え、この表においてはあえて区別しなかった。
- 25) 1994年9月19日、ラバウル近郊の二つの火山（タブルブル山、バルカン山）が噴火した。この噴火の影響で11万人以上の人々が避難生活を余儀なくされた[Post Courier 2004]。大量の火山灰の影響でラバウルの町の多くの建造物は倒壊し、州都も南東に30キロほど離れたココポに移された。噴火から10年が経過した現在（2005年9月）においてもタブルブル山は火山灰を噴出し続けている。この降灰のためにラバウルの町の復興は遅れ、また農作物が育たないなど近隣の住民は、今なお大きな損害を被り続けている。
- 26) この「伝統的財」にはタブだけでなく、同州内の他の部族が伝統的に使用してきたカカル *kakal* とミス *mis*と呼ばれる貝貨も含まれている。しかし現状では、タブに補完貨幣化に対して払われているほどの政策的努力が、他の「伝統的財」に向けられているとは言い難い。
- 27) レオ・ディオオン氏は2002年からは州知事に就任している。
- 28) この調査に関わったStephen DeMeulenaere氏はAppropriate-Economics.orgのコーディネーターとして活動している人物で、そのウェブサイト “Local Exchange Systems in Asia, Africa and Latin America” [URL: <http://www.appropriate-economics.org/>]において、タブについての情報をまとめている[DeMeulenaere 1995-2002]。
- 29) さまざまなタイプの地域通貨が存在するが、基本的に共通している点としては、近代貨幣では手が回らない個別地域内における様々な資源（特に金銭的評価に馴染みにくい人的資源など）の流通を地域通貨（補完貨幣）を利用することによって活性化することを目指している点が挙げられる。
- 30) ただし翌2003年には、すでにこの交換所におけるタブとキナの交換サービスは中止されており、2005年1月の時点では再開されていない。
- 31) この質問とそれに対する回答からは、政治的な意図を読み取られてしまう可能性が少なからずあるため、ここではこの人物の名前は伏せることにする。
- 32) 二つの貨幣が共存しているという点に関して言えば、米ドルのようなグローバルな基軸通貨とその影響下にある国家の法定通貨が交換媒体として並行して使用されている例は現在世界中に見られる（例えばDominguez 1990など）。またロシア、東欧を中心とするポスト社会主義国では、1990年代以降、貨幣の流通量不足やインフレなどにより、様々なものが代用貨幣として使用されている[Anderson 2000, Cellarius 2000]。
- 33) 湖中[2005]は、地域通貨が「近代市場経済の物量主義的な価値観」によらない「オルタナティブな経済の仕組みを樹立」を目指している以上、「使用頻度や使用枚数」といった換算可能な尺度によ



---

てその評価をすることは妥当ではなく、「『地域通貨はなぜ使われないか』という問いは、近代市場経済が、それとは異質な地域固有の経済論理を土壌として動きだそうとしている地域通貨を、自らの論理に取り込もうとする際に発せられる丸め込みの問いに他ならないのである」と論じる[湖中 2005: 54]。それに対して、ここで私はタブを「もっともよく使用されている」と評し、またタブの補完貨幣化においては流動性が高まるかが重要な問題であると見ている。私がそこを問題とするのは、イーストニューブリテン州が意図するタブの補完貨幣化は、そうすることでタブがよりよく使用されることを狙っているものに他ならないからである。湖中は、地域通貨は近代市場経済への対抗、オルタナティブから「異質の地域固有の経済論理」へと向かう動きであるとしている。それに対してタブは「異質な地域固有の経済論理」をまさに体現するものであり、タブの補完貨幣化はその「異質な論理」から対抗あるいはオルタナティブへの動きと考えることができるだろう。近代市場経済のオルタナティブとして想定されているのであるから、当然どれだけ使われるかが問題にされるのである。「異質な地域固有の経済論理」と近代市場経済のオルタナティブ、そして法定通貨と地域通貨と「原始貨幣」がどのような関係にあるのかという問題は、今後考えていくべき重要な課題である。

---

## 参考文献

Cernohorsky, W. O.

- 1984 *Systematics of the family Nassariidae (Mollusca: Gastropoda)*. Bulletin of the Auckland Institute and Museum No. 14.

Danks, Benjamin

- 1888 On the Shell Money of New Britain. *Journal of the Royal Anthropology Institute of Great Britain and Ireland* 17: 305-18.

Dominguez, Virginia

- 1990 Representing Value and the Value of Representation: A Different Look at Money. *Cultural Anthropology* 5(1): 16-44.

Douglas, Mary

- 1967 Primitive Rationing: A Study in Controlled Exchange. In *Themes in Economic Anthropology*. Raymond Firth (ed.), pp.119-47, London: Tavistock Publications.

Einzig, Paul

- 1966 *Primitive Money*, 2nd edition. London: Pergamon Press.

Epstein, A. L.

- 1963 Tambu: A Primitive Shell Money. *Discovery* 24: 28-32.
- 1969 *Matupit: Land, Politics, and Change among the Tolai of New Britain*. Berkeley: University of California Press.
- 1979 Tambu: The Shell Money of the Tolai. in *Fantasy and Symbol*. R. H. Hook (ed.), pp.149-205, New York: Academic Press.

Epstein, T. S.

- 1968 *Capitalism, Primitive and Modern*. Canberra: Australian National University Press.

Errington, Frederick and Deborah Gewertz

- 1995 *Articulating Change in the "Last Unknown."* Boulder: Westview Press.

深田 淳太郎

- 2002 『人類学における貨幣理論をめぐって:ニューブリテン島東部Tolai社会における伝統貨幣tambuを事例に』 2001年度一橋大学大学院社会学研究科提出修士論文。
- 2006 「パプアニューギニア、トーライ社会における貝貨タブをめぐる現在の状況」 『くにたち人類学研究』 1

Kleintitschen

- 1906 *Die Küstenbewohner der Gazellehalbinsel*. Hilstrup: Herz Jesu Missionshaus.

湖中 真哉

- 2005 「地域通貨はなぜ使われないか:静岡県清水駅前銀座商店街の事例」 『国際関係・比較文化研究』 3(2): 33-58.

---

小坂 恵敬

2002 『パプアニューギニア、トーライ社会における近代と伝統の「接合」：貝貨銀行を巡る冒険』 2001年度三重大学大学院人文社会科学研究科提出修士論文。

2003 「貝貨タブの可能性：パプアニューギニア・東ニューブリテン州の貝貨銀行」 『日本オセアニア学会ニューズレター』 77: 1-9.

Neumann, Klaus

1992 *Not the Way it Really Was: Constructing the Tolai Past*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Parkinson, R.

1887 *Im Bismarck-Archipel*. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Parry, Jonathan and Maurice Bloch

1989 Introduction: Money and the Morality of Exchange. In *Money and the Morality of Exchange*. Parry, Jonathan and Maurice Bloch (eds.), pp. 1-32, Cambridge: Cambridge University Press.

Salisbury, R. F.

1970 *Vunamami*. Berkeley: University of California Press.

---

## 参考資料

### <政府資料>

East New Britain Provincial Administration

2003 *Terms of Reference for the Tabu Research Project (Second Phase).*

Papua New Guinea National Statistical Office

1997 *Consumer Price Index.* (December Quarter 1997)

2002 *PNG 2000 Census - Table Retrieval System.* (CD-ROM)

2003 *Consumer Price Index.* (September Quarter 2003)

### <新聞>

Post Courier

1999a *"East New Britain Province may approve traditional shell money as legal tender."*  
November 16.

1999b *"East New Britain shell money to become legal tender."* November 26.

2002a *"Pay fees with shell money."* January 22.

2002b *"Rabaul exchange is open for shell money."* February 13.

2004 *"To rise from the ashes."* September 21.

The Independent

2000 *"East New Britain shell money to be legalized."* July 20.

### <インターネット上に存在する資料> いずれも2005年9月30日にアクセス確認

DeMeulenaue, Stephen

2002 The valuation and Production of Tabu Shell Currency.

URL: [http://www.appropriate-economics.org/asia/png/Making\\_Tabu\\_Shell\\_Currency.pdf](http://www.appropriate-economics.org/asia/png/Making_Tabu_Shell_Currency.pdf)

DeMeulenaue, Stephen (ed.)

1995-2002 *Articles on Tabu Traditional Shell Currency.* Local Exchange Systems in Asia, Africa and Latin America.

URL: <http://www.appropriate-economics.org/asia/png/>

[Articles\\_on\\_Tabu\\_Traditional\\_Shell\\_Currency.pdf](#)

Radio Australia

2002 *Counting Shells at a New Bank in Papua New Guinea.* Radio Australia. Pacific Beat. Melbourne, Australia.

URL: <http://166.122.164.43/archive/2002/March/03-01-09.htm>

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州における  
貝貨タブの補完貨幣化プロジェクトをめぐる現在の状況

---

2006年3月

第1版第1刷発行

非売品

編集・発行 : 富士ゼロックス小林節太郎記念基金  
〒107-0052 東京都港区赤坂2丁目17番22号  
電話 03-5573-2203

---

Printed in Japan